

## 「タイの日常に浸透する日本食」

辻本 浩一郎

### ＜増える日本食レストラン＞

現在、タイには 5,856 社の日系企業が進出しており、タイで生活する日本人は 78,431 人です。2022 年時点でのタイ国内の日本食レストランは 5,325 店舗あり、2007 年の 745 店舗から急激に増加しています。バンコク市内の大型デパートを訪れると、寿司、とんかつ、天ぷら、カレー、しゃぶしゃぶ、丼ものなど、日本食が豊富に提供されており、数々の有名な日本食チェーンも出店しています。食事の面では、タイにいることを忘れるほどです。私が住むエリアの大型デパート・セントラルラマ 9 では施設内の飲食店 106 店舗のうち、日本食飲食店は 37 店舗と 3 割以上を占めています（比較として、イオンモール広島府中店の飲食テナントは 61 店舗）。

日本食飲食店の店内に入ると、タイ人従業員から元氣よく日本語で「いらっしゃいませ」と出迎えられ、帰る際には「ありがとうございました」と見送られます。店内は清潔に保たれ、日本同様の徹底されたホスピタリティを感じます。

### ＜身近になった日本食＞

私が生活しているラマ 9 世駅エリアには、上述の大型デパートや大型ナイトマーケット、オフィスビルや高層マンションが立ち並び、夜間は多くの買い物客や観光客でにぎわっています。このエリアは特別日本人が多いわけではなく、施設内や飲食店の利用客は 9 割以上がタイ人です。タイ国内に展開している他の大型デパートでも、日本食が飲食店の多くを占めているのが見受けられ、タイ国内で日本食がとても身近な存在となっていることを示しています。

### ＜富裕層に人気の「OMAKASE」＞

しかし、タイにおいて日本食のほとんどは庶民的な価格とは開きがあります。街中にあるタイ料理食堂は、市街地であっても 40～60 バーツ（約 163～245 円）程度の価格帯である一方、日本食料理店の多くは一食当たり 150～300 バーツ（約 614～1,228 円）程度の価格帯が主流です。バンコク市内の最低賃金が日給 353 バーツ（約 1,445 円）であることを考えても、日本食レストランは高級とみなされることが多

いでしょう。そのため、日本食は主に中間所得層以上のタイ人に利用されていると考えられます。

さらに、その上の富裕層に向けた日本食料理店に焦点を当てると、近年タイでは「OMAKASE」と呼ばれる寿司など日本食をメインに扱ったコース料理が人気となっています。価格帯は 1,000 バーツ（約 4,096 円）から 1 万バーツに迫るものまで様々あり、ウニなど高級食材を扱い、旬の地魚を日本から空輸するなど産地直送にこだわり、一部の店では予約困難なほどに人気を集めています。こうした高級感や本場志向がタイ人富裕層に受けているようです。

### ＜286 円のカツカレーも登場＞

その一方で低価格の日本食料理店も増えています。主な出店は、デパートであっても高層階ではなく地下階やフードコート、ガソリンスタンドの飲食テナント、地方や郊外で、価格は 100 バーツ（約 409 円）以下のことが多いです。最近私が訪れたデパート内のフードコートでは、わずか 70 バーツ（約 286 円）のカツカレーをいただきました。ルーはレトルトではありませんでしたが、揚げたてのカツ、福神漬け、わかめスープまで添えられてこの価格には驚きました。

このように、タイにおいて日本食は高級店から手軽な飲食店まで、多様な価格帯で提供されています。幅広い層の人々が日本食を日常的に楽しむことができる環境が急速に拡大していることを実感します。タイの食文化において、日本食は今後ますます重要で身近な存在となっていくでしょう。



【70 バーツ（約 286 円）のカツカレー】